

ホトトギス

昭和二十四年五月二十八日
令和元年五月一日発刊
第百二十二巻第五号

ホトトギス

五月号



風雅の小筥 「十六」

廣太郎

先月の続きのようになってしまいが、先月は投句の段階での間違いについて述べたが、恐縮ながら最近特に多くなってきたように思える、句会での清記の間違いについて少し述べてみたいと思う。

勿論この問題は私がホトトギス社に入社した頃からあったので、永遠の課題と言っても大袈裟ではないのかも知れないが、作者が正確に投句したという前提においては、やはり間違われた作者の落胆は如何ばかりであろう。と、嘆いていても始まらない。私がオリジナルに考えたわけではないが、先ず対策の一つの案として、清記の時には、どうしても写す句を日本語として読みながら書く、そうすると無意識に書き手の鑑賞、解釈が生じて、つい間違えてしまうのではないか。となると日本語として解釈出来るような句で写し方、そう反対から書く。例えば「遠山に日の当りたる枯野かな」という句であれば、清記用紙の下から順に「なか野枯るたり当の日に山遠」と書くと、日本語を意識せず文字だけを追えるだろう。ただ、文字のバランス等色々問題が出てくるのも事実だろう。

現実には現在最善策として、これは私が山陰地方の句会での経験から東京のある句会でも採用しているのだが、他の句会でもあるのではないか、清記が終った時点で隣の人へその清記用紙と短冊を回してチェックしてもらう、という方法である。ルールとしては、万が一間違った箇所を直す時、元の清記者には間違いを決して指摘しない、という事だ。時間の制約も考えなければならぬが、色々他にアイデアがあれば御教示頂きたい。

句日記 汀子

平成三十年五月五日 芹屋ホトギス会

小は大兼ねたることも鯉載
座談会済めば夏めく庭に出る

五月六日 下萌句会

山荘の火取虫とてなつかしく
早々と咲き終りたる牡丹かな
夏めくと思ふ油断のありにけり
咲き終りたる牡丹の所在失せ

五月七日 ロイヤル俳壇

万緑の濃淡歴史ある庭に
吟行を済ませ涼しき灯の下に

五月八日 大阪倶楽部

更衣どかかに不安ありしこと
短夜ど熱睡したる一部分
何となくそはそはとして更衣
更衣して薄暑の消えてゐたる雨

五月八日 綿業倶楽部

庭の薔薇剪りて香りを移す部屋
空多き五月の日にひそむ雨催ひ
旅多き五月の日日となりにけり

五月十日 清交社

ふと浮かれ心のありし祭かな
桐の花四国の旅路彩れる
近くより遠くの視界桐の花
祭寄付用意のありて主留守

五月十一日 工業倶楽部

薫風や旅のつづきのやうな日々
短夜の前の予定をこなしつつ
一億年前とは蟻のことなりし

五月十二日 四国ホトギス同人会

母の日の花贈られて旅に出る
句碑の字をなつかしみつ初夏の旅
目つむれば花の吉野の絵巻物
快晴の旅 夏潮の景の中

万緑の中に小さく下り立ちぬ
茅花又茅花吹かくる旅心
五月十三日 四国ホトギス俳句大会

薔薇に雨旅路を濡らしはじめけり
白鷺のねぐらは薔薇の香をまといひ

五月十五日 有恒俳句会

武者人形飾らぬ月日子等有つ
探しものばかりしてをり夏めく日
薫風や旅も家居もあるがまま

五月十五日 無名会

今日見えぬ旅の富士山夏霞
うすうすと六甲所在夏霞
夏霞より富士の景展けたる
五十キ口制限の道夏霞
咲き終る木もこれから花水木

五月十六日 夏潮句会

風五月やうやく癒えし旅疲れ
上京も旅の一つよ夏めきぬ
この頃の地球は不思議夏めくも
風音の中に五月のありにけり
夏めくや旅の写真の配らるる
又一人五月の庭を抜けて来る

五月十七日 クラブ合同

まだ初夏といふに追はるる心かな
健康な朝のはじまり明易し
山蟻の畳を這うてゐる暮し
この家と共に泰山木の花
気にならぬ蟻の存在とて山家
明易や仕事山の山の待つ暮し

五月十八日 アネモネ句会

薫風のかげらほども欲しき午後
快適な五月ならざること又
五月十九日 北海道ホトギス同人会

万緑の蝦夷の大地へ降り立ちし
ライラック明倫さんはもう居ない

迎へられたる万緑を洗ふ雨
軽快な五月の旅となりぬべし
五月十九日 北海道ホトギス俳句大会前日句会

誰彼の消息聞くもリラの旅
五月二十日 北海道ホトギス俳句大会

快晴の札幌の朝ライラック
若者の闊歩する街輪新樹
邂逅の虚子の軸より風薫る
五月二十四日 ささらぎ会

新緑の蝦夷の旅路を語らばや
ふと淋したとへりラ咲く旅なれど
旅共にせし日語らんライラック
新緑の旅一日雨一日晴
五月二十五日 時雨句会

五月二十六日 句会と講演の会

旅し来し若葉美しかりし蝦夷
偲ぶこと多し若葉の頃の旅
又偲ぶ旅路よりリラに心寄せ
なつかしき思ひ出ばかりライラック
もう居ない友を心に抱く夏
淋若葉より零れく草笛を知る
五月二十八日 稽古会同窓会

五月二十九日 稽古会

健康は何にも勝ることも夏
締切は三時そろそろ集ふ夏
生きてゆくところは大変老の夏
稽古会涼しく集ひ来たりけり
半世紀以上経つ会涼しさよ
皆話したき心もて涼しき灯
二日目は総勢七人夏稽古
寝過すといふ若さなし夏稽古
お茶で喉うるほすことも老の夏
二日目は目覚めの早き夏の
明易し加へて老の旅の朝

廣太郎句帳

廣太郎

平成三十年五月二日 カトリック新聞選者時

春惜み帰天惜みて葬儀ミサ

五月二日 「冬野」 老千百号記念句会

住人の手春風纏ひつつ除幕
図らずもどんたくに会ふ句碑除幕

五月五日 若屋ホトギス会

夏めいて鶴の出さうな芦屋浜
披かれて句碑の金文字若楓

五月六日 野分会居屋例会

軽暖に縮んでゆける博多かな
川幅を広げ薄暑の芦屋川

五月六日 青嵐会居屋例会

風の綾麦秋と空繋ぎゆく
麦の秋空へと続く蝦夷大地

五月十日 土筆会

松蟬の鳴いて地軸を揺らしけり
祝ぎの座へ卯月曇を遠ざけて

五月十一日 四国ホトギス同人会、大会

子供等の田植江戸の世近付けて
新緑に姿勢正して年尾句碑

五月十三日 新緑に姿勢正して年尾句碑
蟻嫌ひとは逸早く蟻見付け
美浪さんの化身か揚羽蝶乱舞
卯浪てふ鳴門の渦の叫びかな
三人の讃岐美人に薔薇遠慮
汗の顔歪めマラソン八周目

青鷲に攻め落されてゐる一樹
五月十四日 朝日カルチャー若草句会

筍に 献立五つ 決まりたる
花水木都心の風を透明に

母の日ややうやく次男決まりさう
日も風も知らず筍掘られゆく

平成を思ふ母の日とはなれり
筍に五山優しく風送る

母の日や運転止めぬてふ八十路
五月十五日 北國文芸選者時

筍に 錦市場の活気かな
五月十六日 蕉心会

天帝に新緑揺れて首都の初夏
水帝に再緑揺れてをりにけり

すれ違ふ船薫風を分け合ひて
弟に慶事あるかも夏来る

水嵩を撫でて薫風過ぎ行けり
芭蕉の世引き寄せ館の木下闇

大川の嵩を統べゆく卯浪かな
五月十七日 登高会

母の日や銃後の守りてふ歴史
母の日や子は皆違ふ道歩み

鯖火燃ゆ太平洋を駆けつつ
鯖を食ふ西城秀樹逝きし夜

山荘は朽ち果ててしまふ夏蔵
五月十九日 北海道ホトギス同人会、大会

新緑を輝かせたる蝦夷の雨
若葉雨蝦夷の彩りありにけり

蝦夷の夏気温八度に降り立ちぬ
若葉雨蝦夷に潤ひ広げさく

着いてすぐ締切といふ涼げさく
冷えびえとひえびえと蝦夷夏に入る

花博士このライラック見てますか
雪溪を眼下に蝦夷へ高度下げ

楡新樹蝦夷に蒼天引き寄せて
この風が蝦夷の新緑仕上げゆく

五月二十日 若水句会

牛と馬雛嚳粟蝦夷の大地かな
草笛や唱歌軍歌と続きゆく

夏場所の力士自転車連ね着く
大川の流れ告げゆく五月場所

五月二十三日 目黒学園句会

風炉手前現世少し遠ざけて
秀吉の愛でし茶器とや風炉手前

五月二十六日 ホトギス社句会

草笛を自由自在に卒寿翁
風に乗る草笛風の消す鳥語

ビル群の中の神域樟若葉
薫風や俳句は世界遺産へと

五月二十七日 青嵐会東京例会

新緑を抜け蒼天を目差す塔
風筋を見せ夏蝶の折り返す

風薫る首都の一画てふ自然
五月二十七日 野分会東京例会

江戸前の聴くに鱧の釣られゆく
風の歌聴く名園の薄暑かな

五月三十一日 静の会

海亀や浦島姓の多き里
海亀の泪竜宮見て来し目

五月三十一日 NHK俳句一出句

光年を三瓶にをさめ星月夜
洗ひたる硯に昨日見てをりぬ

盆の月一秒半の夢を見て
対岸のチャペル流灯照らしゆく
梯を追ふ手火花を持つ手にも

雑詠 廣太郎 選

句の神の旅立ち筆紙ふところに
 武の神の旅に重たき腰の太刀
 一管の笛を抱きたる神も旅
 袖無の中に小さく母の居り
 海原を大地としたる鯨かな
 冬の蜂日差の中を漂へる
 喜多流を見たしと思ひ年明くる
 四海波耳馴れたるを謡初
 昆布好きなれど飾りしことなかり
 小春日の東京タワー力抜き
 クリスマス銀座が銀座らしくなり
 湯たんぽに足より眠くなつてゆく
 煤逃の武士の世へ潜り込む
 人仰がしむ日の天守灯の聖樹
 天守てふ光に向ひ冬木の芽
 年明けぬ昔のことはみな忘れ
 八方に不義理重ねて老の春
 玄関に咳をこぼして出てゆきぬ

相模原 木村享史

同

袋井 湖東紀子

同

神戸 後藤比奈夫

同

龍ヶ崎 今橋眞理子

同

奈良 古賀しぐれ

同

東京 今井千鶴子

同

同

同

同

同

同

同

聖夜劇小さきあくびの羊飼ひ
 年用意ピアノの蓋はしばし閉づ
 蒼穹に紅さらけ出す寒牡丹
 猫何か悪さをしさう神の留守
 たくさんの葉が落ちてをり神の留守
 注連縄の神有月の太さかな
 冬の日や真綿のごとき雲の中
 闇迫り来る夕映の冬紅葉
 大仏の裾彩りて冬紅葉
 日本を旅立つ日とて葱刻む
 中世の鐘の音に舞ふ冬の鳥
 短日の時計の針を戻す旅
 文才も胃病もなくて漱石忌
 キリストに十二使徒みて小鳥来る
 観音の臍美しくしぐれけり
 初旅や夢の一富士まのあたり
 初旅や術後の身とは思はれず
 湖畔の灯ふえて明けそむ春隣
 訪ね来し虚子物語嵯峨小春
 智照尼を訪ひし思ひ出冬日和
 冬帝に引き戻されし命とも
 まなうらに今尚虚子や冬日和
 不気味なる夢に覚めたる寒さかな
 船波の小春の湾を押しよせる

神戸 涌羅由美

同

静岡 須藤常央

同

同

福島 加藤あけみ

同

同

同

神戸 山田佳乃

同

同

熊本 岩岡中正

同

同

長岡 安原 葉

同

同

神戸 千原叡子

同

同

同

福山 竹下陶子

同

同

同

同

雑詠句評（四月号より）

真青なる空の瑕瑾の如く鷹 龍ヶ崎 今橋眞理子

雲一つない冬の突き抜けるような、真つ青に晴れ渡った空である。そこに猛禽の仲間の大きな鷹が、羽を広げてどこからともなく飛んできた。瑕瑾とは美玉の疵、又は欠点、恥とある。人の指の疵とかではなく、意味は深い。敢えて難しい言葉を使ったところに、天空の広さと鷹の猛禽であることの豪壮さが描かれていると共に、人間社会の複雑さも想定される。宇宙の壮大ささえも見事に描かれた一句。（さい雪）

筆者も何度か鷹を見た事があるが、素人目には鷹と見分けがつかないほど高空を飛んでいる事が多い。鳶のように群をあまり作らないとも聞いた事があるが、何れにせよ大空の一点となるほどの距離を「瑕瑾」と疵のように詠んだところに、猛禽らしい獠猛な迫力を感じるのである。（廣太郎）

闇汁や虫も殺さぬ顔をして 東京 田丸千種

部屋の灯を消して持ち寄った食材をそつと鍋に入れ、煮た後に、暗くしたままの部屋で食するのが闇汁である。そのため、一体何が入っているのか見当も付かない。気が置けない人の集まった闇汁ではあるうが、自分の箸にかかった「モノ」を口にするこのちよとしたわくわくと大きなどきどきは何ともいえない。「虫も殺さぬ顔をし」た人が、闇汁を言い出した人なのか、闇汁に集まったみんななのか、それともこんな「モノ」までを入れて澄ましていた人なのか、それにこんな「モノ」とは何だったのかなどなど想像の世界を揚げさせてくれる一句である。（しげ人）

実は筆者は実際闇汁をやった記憶が無い。子供の頃、ある野球のアニメで、合宿か何かの時闇汁に、それこそ草履や東子等が入れられていて乱闘騒ぎになっているシーンとして覚えているが、現在はちゃんと食べられる物という取り決めがあると聞いた。この参加している人の豹変ぶりが想像すると楽しい。（廣太郎）

〈以下略〉

